



Title	ハワイ, ヒロ市の震災ミュージアム
Author(s)	古屋, 嘉祥
Relation	自然災害復興における観光創造 = Natural disaster recovery and Tourism creation
Citation	CATS 叢書, 9, 115-122
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61191
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS9_11furuya.pdf



ハワイ，ヒロ市の震災ミュージアム

古屋 嘉祥

カルチュラル・ニュース日本支局長

1. 津波情報はハワイの太平洋津波警報 (PTWC) センターから

みなさんこんにちは。ハワイ語でいうと「アロハ (Aloha)」なのですが、北海道は寒いので、アロハの上にジャケットを着て何とか、アロハでご挨拶を出来ました。

まず、私は昨日から、たいへん活発な皆様方の発表を拝聴させていただき、大変勉強になりました。改めて感謝申し上げます。今回、自然災害復興における観光創造というテーマですが、大変タイムリーなテーマではないかと私は思います。このところ日本各地で天変地異というか、いろんなことが起こっています。例えば数日前に、南米チリ沖地震の影響で日本列島に津波注意報が発令されました。実はこの津波ですが、今回のチリ地震の際には、NHK ほか色々な報道機関が、津波の発表にかなり手こずっていました。なぜかと言えば、日本列島における災害においては、日本国内で色々なネットワークが発達していますので、すぐ報道機関が飛んでいって報道できるのですが、津波に関しては、海外との関係があるため、なかなか迅速な情報を提供することができないわけです。この津波注意報に関する情報をどこから仕入れているかと言えば、実はハワイのヒロなのです。ハワイのヒロから情報を入れて、日本の報道機関が、今こういう状態です、ということを伝えているわけです。これができるのは、ハワイのヒロに太平洋津波警報センターという施設があり、さらに、非常に重要な役割を持った太平洋津波博物館というものがあるからです。太平洋津波博物館ですから、ただハワイの津波博物館ということではなく、日本も関係します。こうして津波の情報はハワイからもたらされたということなのです。

みなさんはお聞きになられたかどうか分かりませんが、今年の 7 月 15 日に外国の新聞で“Guardian”という新聞があり、その記事でフランス地球科学研究所 (IST) が研究発表をしています。どの様な発表かという、2011 年の東日本大震災以降、富士山が非常に危険状況にある、という研究発表です。

2. 楽園のハワイでも何度も地震発生

ほとんどの皆さんは、ハワイというと常夏の国、地上の楽園といった、災害も何もない非常にハッピーな島であるという風に考える方が多いと思いますが、実はハワイも火山国で、ハワイにも、八百万の神ではないですが、様々な神様がいて、その神様の代表が「ペレ」という女の神様です。この火山の神様の「ペレ」がどこに住んでいるかというと、今でも住んでいると言われているのがダイヤモンドヘッドです。そのためハワイには、災害がたくさん起こっています。特にこのヒロというところだけを例にとると、もう過去に津

波が 47 回来ています。今から 10 年前の 2006 年の 10 月に、実はハワイの一番大きな島であるハワイ島、Big island ともいいますが、そこにコナというまちとヒロというまちがあり、そのコナの沖でマグニチュード 6.6 の大地震が発生しました。それまでずっとハワイは静かだったのですが、23 年ぶりにこのコナ沖の地震が発生しました。これは大変大きなニュースになりました。ではハワイの人びとはどんな状態であったかといえ、ハワイはご存じのように常夏の暖かい島なので、ジャケットなども着ていませんし、夜寝る時はせいぜい毛布ぐらいしか使わないような人たちがたくさんいるわけです。そんな中で地震が起き、何が起こったのかというと、長時間停電したのです。電気はつかない、ヒーターもつかない、何にもできなくなっていました。たまたま私が、ハワイにいる友達が心配になり、電話をすると「いやもう寒くてしょうがない」と言っていました。しかもその時がたまたまた寒い時だったらしく、困った困ったと言っていました。その友達といろいろ話しているうちに、二つのことを考えました。一つは、ハワイという国、ハワイという場所は、文字の文化を持たない島なのです。日本は、古事記にしても文字をもって文化を伝えてきた国ですが、もともとハワイは文字で文化を伝えるということが過去になかったところ。そこで何があったかといえ、フラダンスやハワイアンミュージックといった、要するに歌とか踊りでハワイの文化を伝えてきたわけです。そこで、この 23 年ぶりの大地震を契機に、もう少しハワイを知ってもらおうじゃないかということで、私がハワイに関する本を出したいと思ったのです。二つ目は、ハワイの自然災害復興と観光対策の様子を日本人に知ってもらおうと考えました。早速その本を作るにあたり、ハワイアン、ネイティブ・ハワイアンのおばあちゃんに、ハワイの神話、民話、色んなことを話してもらい、それを私の友達に聞き取ってもらい、そのメモを集大成して、まずは本にする原本を作りました。そして、本だけではイメージが湧かないため、そこにイラストを入れようということで、2006 年から始め 2008 年に完成したのがこのハワイの絵本です。これは、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんが子どもに読ませて聞かせる本です。これから私のお話する事例を通して、これからは大人ではなく、子ども向けに何かをやらなければならないのだということを非常に痛切に感じました。我々大人は、そんなに長く生きられないわけですから、これからの時代は子どもたちが背負って立ってくれるわけです。子どもたちに何かしてあげなければならないということで、まずハワイの童話の絵本を作りました。

3. 日系人の多く住むハワイ島ヒロ市のまちが津波で消えた

さて、津波博物館の存在をどこで知ったかといいますと、ハワイのオアフ島に、ジャパニーズ・カルチャー・センターというのがあります。ほとんどの日系人が知っている施設だと思うのですが、日本人観光客はほとんど行きません。ですが、そのハワイの文化センターに行くと、日系人の歴史が全て展示されています。是非、ハワイに行かれることがあ

れば、訪ねていただきたいと思います。移民の話を少しさせていただきますと、ハワイは、1860 年代に砂糖産業が大変急速に発達しまして、労働力不足になりました。で、労働力不足が深刻になるのですが、ハワイアンは、どうもその労働に向いていなかったようです。そこで、移民労働者を受け入れなければならないというハワイの政府の考えで、中国、日本、フィリピンから移民を入れるようになりました。そこで、明治に入ってからですね、1885 年から 1900 年にかけて、日本からなんと 7 万 4 千人の日本人がハワイに移住しております。その多くは、九州、広島、山口、和歌山、沖縄から。中でも、広島とか、和歌山県からの移民が多かったのです。ほとんどの方々がどこへ行ったかと言うと、ヒロに行きました。そこにあった砂糖のプランテーションというのが、ヒロのまちを非常に発展させました。そのヒロのまちが、実は何度も津波に襲われており、非常に大きな津波が 2 回ありました。

1946 年 4 月 1 日にアリューシャン列島周辺海底を震源とするマグニチュード 7.8 の地震が発生しまして、津波がハワイ諸島を襲い、ヒロ市を中心に、諸島全体で 200 人近い死者が出ました。

4. 人口増加の予測による都市マスタープランが津波発生後役立った

ハワイ島には、大きな火山が 2 つあります。ヒロはアリューシャン列島の津波で大きな被害を受けているのですが、実はそれ以前から、ヒロには何度も何度も小さい津波が来ており、何とか対策を打たねばならない状況でした。また、ハワイ全体の人口が増え、当初は 3 万人程度を想定していたところ 10 万人程度に増加する可能性があるということで、ヒロの町も人口が増加することが予測され、都市の開発をしなければいけないということがありました。1910 年の人口が当時 6,745 人だったのですが、1940 年までに人口が 10 倍になりました。将来、さらに増加するということから、ヒロの町は、都市マスタープランを策定したのですが、それがこのアリューシャン沖の地震の津波に大変役だったと言われております。最初から大規模な津波が来ると予想して都市マスタープランを策定した訳ではなかったのですが、それを計画していたことが、後で、大きく役立ったのです。

そのマスタープランがどんなものだったかと言いますと、主要施設、土地利用、保健衛生、教育などで、現在の内容とほぼ変わりありません。洪水や火事程度のことは想定した上で計画されていたんですが、津波対応についてはなにも書かれていませんでした。しかしそれが偶然、1960 年の 5 月の南米のチリ沖地震で、マグニチュード 9.5 の巨大地震が発生した時に、このマスタープランが活きたのです。その後、ヒロの町が大きく変わることになりました。実はこの 1960 年 5 月のチリ沖地震時はどういう状況だったかという、夜中に到達することが予想されていました。そこで、住民の皆さんは、夜の 8 時ごろに津波が来るので注意してくださいと情報が伝えられていたのですが、真夜中になって実際に来た津波の高さがわずか数フィート（約 1 メートル）だったので、住民の人達は、こ

れ以上津波は来ないだろうと思ったそうです。ところが、その後、1 時 4 分に大津波が来て、町は壊滅的な被害を受けました。この時に町がなくなったことから、復興計画が策定されましたが、このベースになったのが、先ほど申し上げました、都市のマスタープランプロジェクトでした。非常に早いスピードで復興計画が策定され、すぐにアクションがとられました。

5. 土地の取得・土地所有者の安全な場所への移住

この時にヒロの都市マスタープランではどういうことを計画したかということ、まず余暇区間、レクリエーションエリアを作ろうとしました。それからもう一つは、ヒロの町が面している湾は三日月型の湾ですが、ヒロの都市資源であるので、それを活かした計画にしよう。それから現在の海岸沿いの空間は鉄道と建物で占められていますが、それらを市民の余暇空間として利用しなければいけないという計画でした。それがチリ沖地震による被害を受け、津波復興計画に変わり、その際に、新たに設けられ項目が 5 つほどあります。一つは、土地の取得です。また、区域内土地所有者および利用者に対する移転支援も挙げられ、津波で流された土地の所有者のことを第一に考え、彼らを安全な場所に移住させるために、彼らの土地を買い上げました。

6. 政府関連施設、商用施設は高台の開放区域へ

それから土地利用形態の決定と都市基盤施設の設置。売買または貸借、賃貸による計画施設の配置。また、対象区域内では、政府関連施設が設置される区域と、商用、用務施設が許可される高台の開放区域というような、二つの区域に分けられました。公共のオープンユーズに設定された場所では、基本的には農業と公園利用を前提としました。津波による深刻な被害を免れた人たちについては、条件付きで暫定的な土地利用が認められましたが、住宅の建築は基本的に禁止され、区域内に建築する場合は、業種ごとの建築仕様や、景観、サイン、看板、地下の利用など細かい規定が定められました。

7. 震災ミュージアム（太平洋津波博物館）登場までの経緯

そこで、なぜ太平洋津波博物館ができたのかということですが、実はこの津波博物館を作ろうということに、非常に強い関心を示した方がおります。その方が、博物館の設計者である C.W.Dickey さんという方です。この方が、1931 年に、旧ハワイ銀行の本社を蘇らせ、この津波に関する情報の発信地にしようと考えられました。この Dickey さんの計画が住民の方々に認められ、1994 年に、この津波博物館が建設され、1998 年に開館しました。

8. ハワイ大学ヒロ校が子供たちのために津波教育と防災グッズを提供

この時に非常に力を入れたのがハワイ大学です。ヒロにはハワイ大学のヒロ校があります。このヒロ校におられる Walter Dudley という博士が考えたのは、この津波博物館は、ただ単なる津波博物館にしたいということです。それが何かというと、被害者を追悼する意味を含めて、これから世界にこの津波の恐ろしさを情報発信していくんだということです。特にハワイにいる子どもたちを対象に、子どもたちに向けたプログラムをたくさん作っていかうということで、この Dudley さんと、それから後に館長になる Donna W.Saiki 氏は、小中学校の子どもたちが、この施設を利用することによって、津波の意識を高められるようにという思いをもって、この津波博物館を作ったのです。子どもたちがオリエンテーションで使う部屋がありますが、ほぼ毎日のようにハワイ州の色々なところから、津波の勉強に来ております。現在は、ヨーロッパ、アメリカその他からも継続的に来ております。どうしてこんなに津波博物館が人気があるのかというと、やはり子どもを対象にしているということが、非常に大きな成果だろうと思っております。そして、私が行きましたら、この東日本大震災のことがいち早く津波博物館でも紹介されておりました。もうコーナーができております。いまから 3 年前ですが、このように展示されており、情報提供がなされておりました。

9. 津波で襲われた日本人町「新町」は沿岸緑地帯公園になった

これは、ヒロの津波に襲われた“Shinmachi（新町）”がどのような状況だったかという写真です（写真 1）。現在津波に襲われた日本人町“Shinmachi（新町）”は公園になっております（写真 2）。これが現在のヒロの街並みです（写真 3）。もう一つみなさんにお話したかったのが、ヒロの小中学生のために、ハワイ大学の先生たちが作った、子どもたちに通学の際に持って歩いてもらう、色々な津波防災グッズについてです。どのようなものかということ、実物はこんなに小さいです。こんなに小さいのですが、広げると、このくらい大きくなります（写真 4）。これに、色々なことが書いてあるわけです。全ての子どもたちが、必ずカバンの中に入れて持っております。裏には地図が乗せられ、それから色々な細かい注意事項が書かれております。学校では、津波対策の本とか、津波について学ぶ教科書を、必ず授業の中で取り入れております。

10. 現在も毎月の初めにサイレンを鳴らして防災訓練を実施

このように、子どもの目線に立った津波教育をしているのが、このハワイの太平洋津波博物館の成功要因ではないかと思います。またヒロを襲った津波と、1940 年のマスタープランで沿岸緑地帯の開発が実現して以来、50 年を迎えたということで、50 周年イベン

トが開催されました。それから、現在“Yashijima（椰子島）”というところには、その当時の時間が何時だったかという、時間を示す時計も置いております。また、防災計画の一つとして、毎月 1 日にサイレンを鳴らして、防災訓練をしています。これは、継続的にずっと実施されています。こういうことが今でも行われることによって防災意識が高まるということです。私は、その話を先生方や館長から聞く度に、ああ、やっぱり日本もこのようになれば良いのかなあという風に思う次第でございます。少し話が長くなりましたけれども、これで話を終わらせていただきます。ありがとうございます。



写真1 ヒロの津波に襲われた“Shinmachi（新町）”（出典：Pacific Tsunami Museum）



写真2 現在は公園になっている日本人町“Shinmachi（新町）”



写真3 現在のヒロの街並み



写真4 津波防災グッズの地図